備える 3.11から 災前の策　第117回　想定シリーズ⑯ 避難所（下）

女性への配慮 不可欠

南海トラフ巨大地震への備えを進める「想定シリーズ」は、前回に続いて、避難所について名古屋大減災連携研究センターとともに考える。今回は「女性の視点」がテーマ。トイレや着替えはもちろんのこと、男性が気に留めないところに、女性はストレスや不便を感じる。女性も積極的に避難所運営にかかわり、声を反映する取り組みが必要だ。（今村太郎）

名古屋市中心部に住む備谷晴美さん(28)が、指定避難所となっている近所の中学校にたどり着いたのは、南海トラフ地震の発生から二時間後。七月とあり、体育館は外に輪を掛けて蒸し暑く、拘ってひもの中の長男(2)の額からは汗がみるみる流れ落ちた。「おっぱいをあげないと。でも、どこで…」

その時、その中学校に通う長女(3)が晴美さんを見つけて、駆け寄ってきた。「けがはないの？」。互いの無事が分かり、ほっとしたのもつかの間、長女が尿意を訴えた。

ところが、体育館のトイレには「断水および排水管の破損につき使用禁止」の張り紙。男性たちは、校舎の陰や運動場の片隅で用を足し始めていた。我慢している長女(3)にこうにして干してみたものの、避難所に男子の同級生がいる長女は一これも絶対いや。干さないで」と声を荒らげた。

届けられる支援物資（メモ①）も、衣類は男女用が設トイレも設置され、男女別の着替えと部屋も設けられがないよう目を光らせる担当の男性がいる。晴美さん

「みんな無事で、本当に良かった」。体育館の片隅に場所を確保した一家は、配られた毛布を敷いて寝ようとした。だが、蒸し暑さで汗びっしょりに。苦労して洗濯を終えて物干し場に向かうが、干す場所は男女が着替える部屋はない。そんな中、長女が晴美さんにこぼした。「知らないおじさんがずっと見てくる…」

◇　◇

一週間後、ようやく避難所の運営が軌道に乗り始めた。物資が次々と届き、仮混在。「物資倉庫となった教室には、食料品などの盗難の友さんが勤務先から駆けつけて合流した。

美さんの朝の日課となった。

ただ、長い列に並んで水道にたどり着いた時には、汗びっしょりに。苦労して洗濯物や物資について、運営に当たる年配男性たちに何度も相談しようと思ったが、そのたびにためらった。「生き延びて、生活できるだけでも恵まれていると思うべきだ」。そう言われるに決まっている、という遠慮もあった。晴美さんは次第に、ふさぎ込むようになっていった。

ただ、長女が晴美さんにこぼした。「知らないおじさんがずっと見てくる…」

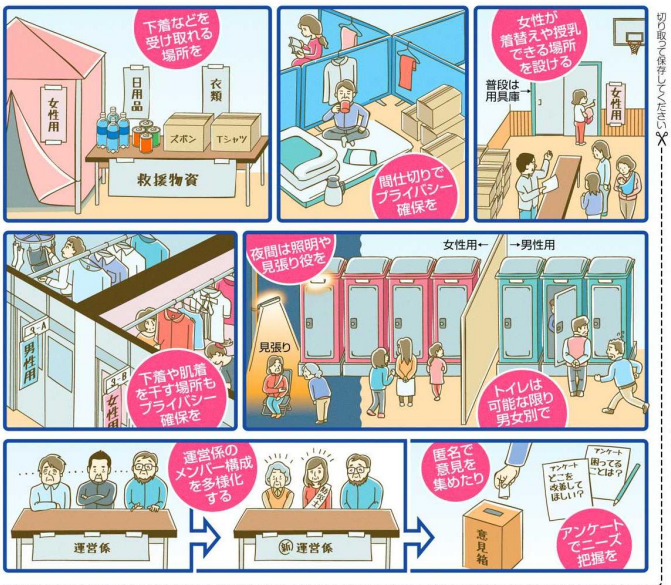
◇　◇

地震から数週間後。友之さんは再び出勤するようになり、昼間は晴美さんが子ども二人と避難所で過ごす日々が始まった。昼間、避難所にいるのは、運営に当たっている自主防災組織や町内会の年配男性と女性、子どもたち。友之さんに憑依をこぼしていた晴美さんは、口数が減った。仲が良かったママ友も、「ここでは暮らせない」と親類宅に身を寄せた。

「備える」は毎月第1月曜日掲載。次回は8月3日で、引き続き「想定シリーズ」を掲載します。

メモ① 高さ30㌢ほどの段ボールやプラスチック製の箱に便座と、排せつ物の凝固剤がセットになった非常用トイレが、通信販売などで5000円前後で売られている。東日本大震災の被災地では、和式のトイレで用を足したことがない子どもたち向けに、和式の上に掘え付けて洋式として使う便座も重宝された。

メモ② 愛知ボランティアセンター（名古屋市）が東日本大震災の支援物資をいったん名古屋市内で開封し、衣類を男女別、サイズ別に仕分けして被災地に送った先進例がある。関係者によると「現地では女性向けの物資を開封する専用のブースも設け、好評だった」という。



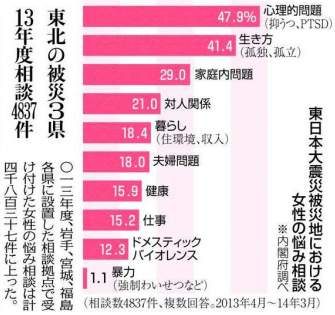
イラスト・井上彰吾

悩み聞き出す工夫必要

東北の被災3県 13年度相談4837件

内閣府男女共同参画局が二〇一三年度、岩手、宮城、福島各県に設置した相談拠点で受け付けた女性の悩み相談は計四千八百二十七件に上った。内訳で多かったのは、震災による「心的外傷後ストレス障害（PTSD）」（48％）や孤独感（41％）、生活の不安（18％）など。一方で、震災によるストレスなどが原因で夫から暴力を受ける「ドメスティックバイオレンス（DV）」（12％）や、強制わいせつやストーカー被害などの「暴力」（1％）もあった。

被災地で相談支援を行った全国女性相談研究会（東京）は「避難所では人目を気にして相談をためらう人も多く、表面化するケースは氷山の一角」。顔見知りになったボランティアが相談相手になって悩みを聞き出すなどの工夫が必要」と話している。



（相談数4837件、複数回答。2013年4月～14年3月）

教えて、センセイ！

運営に女性も積極参加

名古屋大減災連携研究センター協力企画

阪本真由美（さかもと まゆみ）特任准教授（防災学）

東日本大震災では、現地災害対策本部のメンバーとして、避難所の改善策を検討するため、多くの避難所を訪れました。発生直後は、女性が着替えたり、小さい子に授乳したりするスペースはありませんでした。老若男女の共同生活は、女性、特に思春期の女の子にとってはつらい環境でした。

トイレは、特に深刻な問題の一つでした。断水でトイレが使えず、仮設トイレも十分ない中で、やむを得ず自分たちで穴を掘り、ブルーシートで覆っただけの心もとないトイレもありました。男性トイレが外から丸見えで、それに不快感を覚える人もいました。

その一方で、**「仮設住宅から遠いトイレを男女別にしたり、女性用トイレはなるべく明るいところに設置したりするなど、震災を経験した女性たちの意見を反映させる意識の高まりが生まれたのは、震災前の震災に生かされています。**

避難所の運営は、避難している人で行います。自主防災組織や町内会が中心となる避難所が多いでしょうが、メンバーの多くは男性です。そのため、女性の視点が入りにくいという課題があります。**男性と女性を加えて、メンバーの男女比を見直すことが重要です。**

また、自分から進んで勉強して「防災士」「防災リーダー」などの資格をとっている人も各地域にいるはずです。こうした知識がある人を参画させることも、多角的な視点で避難所を運営する一助になります。

一方で、このストーリーに登場する晴美さんにも問題があります。**避難所に避難している人は、お客さまではありません。生活している人が主体的に運営しなければなら、声を上げなくては解決されません。我慢しているのは、自分だけでなく、周囲の人にとってもストレスになります。**

阪神大震災でも東日本大震災でも、犠牲になられた方のうち約15％は、震災後のストレスなどにより健康を崩した「震災関連死」が占めています。復興までの生活は長期化します。健康を崩さないためには、一人一人が住みやすい環境について事前に検討しておくことが必要です。

（c）.中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています